

群 教 セ	E01 - 09
	平23.243集

健康を考え実践する力を育てる健康教育

— 保健学習と保健指導を関連付けた 習得・活用型授業モデルの開発を通して —

長期研修員 石島 保

《研究の概要》

本研究は、小学校において健康を考え実践する力を育てることをねらいとして、保健学習と保健指導を関連付けた習得・活用型授業モデルを開発し、その有効性を明らかにしたものである。具体的には、保健学習で習得した知識・技能を共通の基盤として、保健指導で活用させることで思考力・判断力を育成し、身近な健康課題の解決を図る具体モデルを作成、授業実践することで、健康を考え実践する力が育てられることを明らかにした。

キーワード 【健康教育 小学校 思考力・判断力 習得・活用 授業モデル】

I 主題設定の理由

現代社会における自然環境・社会環境などの様々な変化は、子どもたちに生活習慣病、心の健康問題、性の逸脱行動、薬物乱用、感染症などの新たな健康課題をもたらした。このような健康課題に対して、平成9年の保健体育審議会答申では、健康教育の目標を「時代を超えて変わらない健康課題や日々生起する健康課題に対して、一人一人がよりよく解決していく能力や資質を身に付け、生涯を通して健康で安全な生活を送ることができるようにすること」とし、これを受けた平成10年の小学校学習指導要領改訂では、体育科保健領域（以下保健学習とする）を3・4年生から位置づけた。

しかし、国立教育政策研究所（平成17年度調査実施）の報告では、「小学生段階では、非常に健康習慣についての意識が高く、また健康的な生活がある程度過ごせていた状況が、中学校、高校段階と学校段階が高くなるにつれて生活習慣が崩れ、健康に関する意識も低くなっていく」とある。このことから、小学校の段階で身に付いた生活習慣を成長に伴う生活スタイルの変化に合わせて工夫し、改善できていないことがわかる。このような現状では、日々生起する健康課題に対して「生涯を通して健康で安全な生活を送る」ために「自ら課題を見付け、主体的に考え、判断し、行動し、よりよく課題を解決する」ことは難しいであろうと考える。

また、小学校学習指導要領では、体育・健康に関する指導について学校の教育活動全体を通じて行うものとしている。しかし、現状では保健学習と学級活動の内容〔共通事項〕（2）カ（以下保健指導とする）がそれぞれ単発的に学習されるにとどまり、教師が健康教育で目指す子どもの姿を思い描いて学習活動を展開できていない。また、児童が習得した知識・技能を自分の生活と結び付けて、どのように生かすかを考えたり判断したりする場が十分に設定されていない。本来、児童は具体的な体験をしたり、主体的な問題解決を行ったり、知識・技能を日常生活と関連付けたりしながら、健康の大切さについて実感することから実践への意欲をもつことができるのである。

そこで、それぞれの学年に応じた健康教育で目指す子ども像を明確にし、その子ども像に迫るために、保健学習と保健指導を意図的に関連付けて単元配列をした習得・活用型授業モデルとすることが有効であると考えた。教師が健康教育で目指す子ども像を共有し、授業モデルに基づき学習活動を展開することで、児童は、健康に関する基礎的・基本的な知識・技能を習得し、健康に関する思考力・判断力が育成され、健康の大切さについて実感し、健康を考え実践する力が育つと考え本主題を設定した。

II 研究のねらい

小学校において、保健学習と保健指導を意図的に関連付けた習得・活用型授業モデルに基づいて学習活動を展開することにより、健康を考え実践する力が育つことを明らかにする。

Ⅲ 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 健康を考え実践する力とは

健康を考え実践する力とは「健康の価値を認識し、自ら課題を見付け、健康に関する知識を理解し、主体的に考え、判断し、行動し、よりよく課題を解決する力」のことである。これは、保健体育審議会答申で、時代を超えて変わらない健康課題や日々生起する健康課題に対応するために健康教育で育成すべき資質・能力として示されているものである。

本研究では、「健康を考え実践する力」が育った児童の姿を、目指す子ども像として、発達の段階を踏まえて低・中・高学年で以下のように設定した。

低学年：健康の快さを感じ、健康によい行動を続けることができる子
中学年：健康の大切さを知り、健康と自分の行動を関係付けながら考え、 健康によい行動を実践できる子
高学年：健康の大切さを理解し、健康的な生活を送るための条件を総合的に考え、 自分にあった健康によい行動を実践できる子

(2) 「健康を考え実践する力」が育つ過程とは

「健康を考え実践する力」が育つ過程とは、児童が自ら課題を見付け、その原因や解決の方法を考え、実践し振り返り、新たな課題を見付け出すという問題解決を図る過程である。

すなわち、「健康を考え実践する力」は、「児童自らが健康課題を見付け、健康に関する基礎的・基本的な知識・技能を習得・活用し、その課題が生じている原因や解決の方法を主体的に考え、判断し、行動して振り返り、よりよく課題を解決しようとする」ことによって育つのである。

そして、この問題解決の過程を繰り返すことで、健康に関する思考力・判断力の育成につながり、健康の大切さについて実感することから、「健康を考え実践する力」が高まると考えた。

(3) 健康に関する基礎的・基本的な知識・技能とは

健康に関する基礎的・基本的な知識・技能とは、第3学年・第4学年及び第5学年・第6学年の保健学習の内容に示されているもので、具体的には、『毎日の生活と健康』、『育ちゆく体とわたし』、『心の健康』、『けがの防止』、『病気の予防』に示されている。

(4) 健康に関する思考力・判断力とは

健康に関する思考力・判断力とは、健康課題と既存の知識や技能、収集した情報を意味付けたり関連付けたり価値付けたりして、その課題が生じている原因を考え、行動を選択する力のことである。

本研究では、各学年における健康に関する思考力・判断力を、各学年の保健学習の内容と児童の発達の段階を踏まえて以下のように設定した。

[第3学年] 『毎日の生活と健康』において学習したことで、自分の生活を比較しながら考える
[第4学年] 『育ちゆく体とわたし』において学習したことで、自分の成長や生活を関係付けながら考える
[第5学年] 『心の健康』や『けがの防止』において学習したことで、自分の生活について条件に目を向けながら考える
[第6学年] 『病気の予防』において学習したことで、自分の生活について要因や規則性、関係を推論しながら考える

2 習得・活用型授業モデルについて

本研究では、構成要素を吟味し、授業モデルを構築した。そして、実践例として第5学年と第6学年の具体モデルを作成した。

(1) 保健学習と保健指導を意図的に関連付ける意義

- 保健学習と保健指導が相互に関連し補充し合うことにより、「健康を考え実践する力」を支える基盤となる健康に関する基礎的・基本的な知識・技能の習得と健康に関する思考力・判断力を育成することができる。
- 発達の段階に即した知識・技能を、児童自身の日常生活に結び付けて活用する活動を設定することで、健康の大切さや習得した知識・技能を活用することのよさに気付くことができる。
- 体系化された保健学習と日常生活での具体的な実践を重視する保健指導を組み合わせることにより、発達の段階に即して系統的、計画的な学習活動を繰り返し行うことができる。

(2) 授業モデルの構成要素

授業モデルを貫くねらいとなる「学習課題」、学習の場となる「三つの学習場面」、学習の場をつなげる手立てとなる保健指導における「導入」「題材」「振り返りの視点」を構成要素とした。

① 「学習課題」

学習課題は、発達の段階に即した目指す子ども像に迫るために、保健学習の内容、各学年で求められる健康に関する思考力・判断力を基に設定する。児童が既存の知識・技能を直面する身近な健康課題の解決のために役立つことよさに気づき、自分にあった健康的な生活を実践できるようにするためのものである。

② 「三つの学習場面」

ア 「習得の場面」(保健学習)

保健学習の内容に示されている基礎的・基本的な知識・技能を習得する場面である。児童が自分の生活と結び付けられるような資料を提示することで、興味・関心や学習への意欲を高めるとともに、グループディスカッションなどの話し合い活動や実習を通して、自分の考えを文章でまとめたり説明したりするなどの表現をさせることにより、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させる。

イ 「活用の場面」(保健指導)

保健学習で習得した共通の知識・技能を基盤に、話し合い、課題の原因を追及したり把握したりして、課題の解決の方法を発見させる場面である。

「導入」は、既存の体験などから保健学習で習得した知識・技能を想起させたり、自分の現状について考えたりすることで、問題意識を持たせるとともに、共通に解決すべき問題として学習課題を共有させるものとする。

「題材」は、学習課題をより具体化したもので、個々の児童が共通に解決すべき日常生活の課題として設定する。保健学習で習得した知識・技能を単に当てはめたのでは、その原因や解決方法を導き出せない要素を入れることで、既存の知識・技能へのゆさぶり・葛藤を起こさせる。そこに、課題解決のためのヒントを与えることで、児童は集団や個人で既存の知識・技能を意味付けたり関連付けたり価値付けたりしながら、課題の原因を追及したり、解決の方法を発見したりすることができ、健康に関する思考力・判断力が育成される。

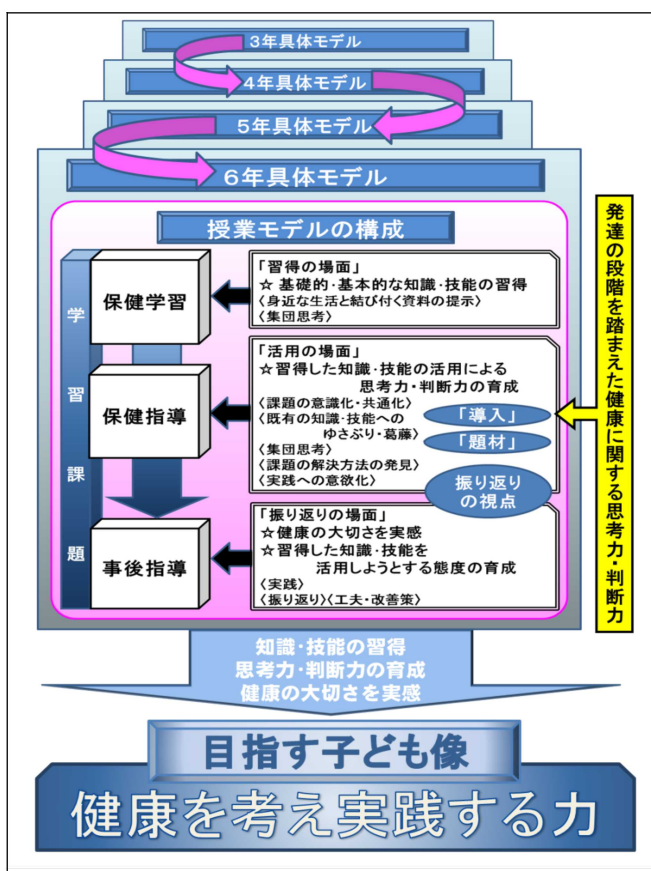


図1 研究構想図

「振り返りの視点」は、保健学習と保健指導の学びを日常生活と結び付けることで、児童自身の健康課題を明確化し、実践への意欲を高めるものとする。

ウ 「振り返りの場面」

「振り返りの視点」に基づいて日常生活を振り返らせることで、日常生活における児童自身の健康課題を明確化し、その工夫・改善策を考えさせる場面である。児童は自分の健康課題に気づき、工夫・改善策を考え実践する活動を通して、健康の大切さを実感し、習得した知識・技能を日常生活と結び付けて活用し、実践する力を養う。

(3) 具体モデル構想の手順(資料編P5参照)

IV 研究の計画と方法

1 実施計画

対 象	小学校5年生 1クラス	小学校6年生 1クラス
活動構成	2時間(保健学習1時間 保健指導1時間) + 事後指導(実践及び朝、帰りの会)	
実践期間	10月6日～10月14日	9月28日～10月7日

2 検証計画

検証の場面	検証の観点	検証の方法
習得の場面 (保健学習)	身近な生活と結びつく資料を提示したり、話し合い活動を用いて自分の考えを表現させたりしたことは、健康に関する基礎的・基本的な知識・技能の習得に有効だったか。	○発言 ○ワークシート等の記述
活用の場面 (保健指導)	設定した題材は、保健学習で習得した知識・技能を含む 既有的知識・技能を活用するのに有効だったか。 ○ 保健学習で習得した知識・技能を含む既有的知識・技能を活用し、表現しているか。	○発言 ○ワークシートの記述
振り返りの場面 (事後指導)	振り返りの視点は、健康の大切さを実感し、習得した知識・技能を日常生活の中で活用しようとする態度の育成に有効だったか。 ○ 習得した知識・技能を活用して、実践しているか。 ○ 習得した知識・技能を活用して、今後の生活の工夫・改善策を考えているか。	○発言 ○ワークシートの記述 ○教師の見取り

V 研究の結果と考察

1 第5学年『安全な生活を送ろう～危険がひそむところ～』

(1) 具体モデルの構想

① 構成要素の設定

ア 学習課題の設定

高学年で目指す子ども像と、保健学習の内容「(2) けがの防止」と第5学年の健康に関する思考力・判断力を基に、「危険を回避し、安全に行動できる能力」の育成を目指し、「安全な生活を送ろう～危険がひそむところ～」という学習課題を設定した。

イ 「三つの学習場面」の設定

三つの学習場面として、習得の場面である保健学習の「(2) けがの防止」と、活用の場面である保健指導「公園で起きた事件の真相を解明しよう!」、振り返りの場面である事後指導を関連付けて単元を構成した。

「習得の場面」では、犯罪が自分たちの身のまわりで起こっていることを意識させ、学習への意欲を高めるために、2008年警察庁（犯罪被害の発生件数）、平成23年群馬県警（不審者情報認知状況）の資料を提示し、「毎年多くの犯罪被害が発生していること」「犯罪は、人の行動や環境がかかわって発生していること」を理解させ、「犯罪にあわないようにするためにはどのように行動したらよいか」をグループで考えさせる。

「活用の場面」の導入では、児童に安全な生活を意識し、危険を回避することが共通に解決すべき課題であることを共有させるために、日常生活と保健学習で習得した「犯罪が起こりやすい環境と行動の条件」を想起させるヒヤリハット体験を発表させる。

題材は、「公園で起きた事件の真相を解明しよう!」とする。事件の真相を「心理的な条件によりの確な行動や判断に影響を及ぼし『危険のわかりにくさ』が生じたため」とすることで、既有的知識・技能を揺さぶり、葛藤を起こさせる設定である。児童は、補助発問を基に既有的知識・技能を活用し、事件の真相「危険のわかりにくさ」が生じた理由を解明する。

振り返りの視点は、これまでに気が付かずに過ごしてきた生活の中の「危険のわかりにくさ」を発見し、自分なりに工夫・改善して実践していこうという意欲を高めるために、「危険がひそむところとその理由、工夫・改善できること」と設定する。

「振り返りの場面」では、安全の大切さを実感し、「危険を回避し、安全に行動できる力」を日常生活と結び付けるために、振り返りの視点に基づき、日常生活の中の「危険がひそむところ」を見付け、「その理由と工夫・改善できること」を考える活動をさせる。

② 具体的な単元の構想(資料編P6～11参照)

指導計画 「第5学年具体モデル『安全な生活を送ろう～危険がひそむところ～』

過程	学 習 活 動	〈構想のポイント〉と指導の流れ
習得の場面 保健学習 1h	犯罪被害の防止 (1) 犯罪が起こりやすい場所・行動を考える。 (2) 犯罪にあわないようにするためには、どのように行動したらよいか考える。 [グループディスカッション] (3) 犯罪にあわない、あいそうになったときの約束を確認する。 (4) 自らの「ヒヤリハット体験」を書く。	基礎的・基本的な知識・技能の習得 〈身近な生活と結び付く資料の提示〉 〈集団思考〉
活用の場面 保健指導 1h	公園で起きた事件の真相を解明しよう! 【集団思考を生かした自己決定】 (5) 導入 ※「ヒヤリハット体験」発表 (6) 「公園で起きた事」の理由を考える。 [グループディスカッション] → 《自己決定》 (7) 「ヒヤリハット体験」の、理由と工夫・改善策を考える。 (8) 日常生活の「危険がひそむところ」につなげる。 ※「危険がひそむところとその理由、工夫・改善できること」	習得した知識・技能の活用による思考力・判断力の育成 〈課題の意識化・共通化〉 〈既有的知識・技能へのゆさぶり・葛藤〉 〈課題解決の方法発見のためのヒント〉 〈振り返りの視点の設定〉
振り返りの場面 事後指導	実践 (一週間の実践) ----- 振り返り ※「危険がひそむところとその理由、工夫・改善できること」 (9) これまでの自分を振り返る。 「感想」を書く。	〈実践期間の設定〉 安全の大切さを実感、習得した知識・技能を活用しようとする態度の育成

(2) 結果と考察

① 習得の場面

犯罪が起きている場所として群馬県警の資料を提示したことで、児童は、近所の公園や駐車場、道路などと結び付けて学習に取り組むことができた。また、グループでの話し合い活動を通して、犯罪が起りやすい環境と行動の条件を「入りやすく見えにくい」「一人」「暗い」「知らない人」とキーワード化し、環境と行動の二つの条件が重なると犯罪が起こる可能性が高まることに気付くことができた。

以上のことから、身近な生活と結び付く資料を提示したりグループ活動を通して自分の考えを表現させたりしたことは、健康に関する基礎的・基本的な知識・技能の習得に有効だったと考える。

② 活用の場面

導入では、ヒヤリハット体験を発表させたところ、「暗い」「空き地」「サングラスをかけた金髪の男（不審者）」「知らない人」（資料1）など、日常生活の中に「犯罪が起こりやすい条件」を含む危険な場面が存在していることに気付き、課題への興味関心を高め、解決への意欲をもたせることができた。

題材の概要を示したところ、児童は「一人でいて中学生に声を掛けられた」に着目し、「一人」「知らない人」という条件が重なったことが事件の真相だと考えた。しかし、「昼間で明るく、多くの人々がいた公園」は犯罪の起こりやすい環境の条件に当てはまらないことに気付き、疑問をもった。そこで、「どうして被害者Aは、知らない中学生とゲームをしたのか」「公園にいた多くの人たちには、被害者Aと中学生の関係がどう見えたか」という二つの補助発問をした。その結果、ほとんどの児童（24名・92%）が「Aはゲームをクリアしたいという気持ちが強かったので、一緒にゲームをした」「中学生がいい人そうに見えて不審者だと思わなかったので、ゲームをした」と予想した。さらに、周囲の人たちは、「被害者Aと中学生は仲良く遊んでいたもので、知り合い（友達や兄弟）に見えた」、「自分たちが遊びに夢中で、二人のことを気にしていなかった」と予想した。そして、被害者Aや周囲の人の欲望、見た目の印象、無関心という心理的な条件が、的確な判断や行動に影響を及ぼし「危険のわかりにくさ」を生じさせたことが事件の真相であると説明することが出来た（資料2）。

そこで、振り返りの視点を「危険がひそむところとその理由、工夫改善できること」とし日常生活の中の「危険のわかりにくさ」を発見するという事後指導へと児童の意識をつなげた。

以上のことから、習得した共通の知識・技能を基盤として、「公園で起きた事件の真相」を話し合わせたことは、安全だと思っている日常生活の中にも危険がひそんでいることに気付いたことから、「条件に目を向けながら考える」思考力・判断力の育成に有効であったと考えられる。

③ 振り返りの場面

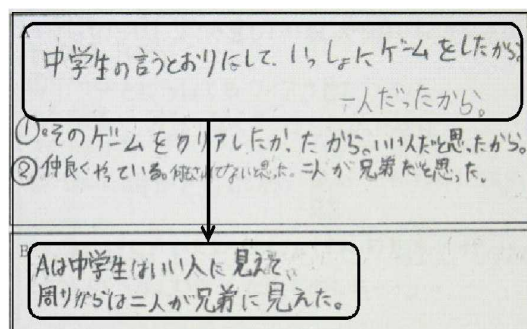
振り返りの視点に基づいた実践の結果、これまで気付かなかった日常生活の中にひそむ危険を、一週間で一人平均3.2箇所の発見することができた（資料3ア）。また、「安全を意識すると身の回りには多くの危険が存在すること」に気付くことができた（資料3イ）。

実践の初期は「信号機を設置する」などの環境の条件に着目した工夫・改善策が多かったが、「自分でできることはないだろうか?」と支援したところ、自らの行動の条件に着目して考える

資料1 「ヒヤリハット体験」

「買い物の帰りが遅くなった。暗くてこわかった」
「お店で、一人でいたら高校生に声をかけられた」
「空き地で遊んでいたら、サングラスをかけた金髪の男の人がこっちを向いて立ち上がった」など

資料2 ワークシートの記述



児童が増えた。また、実践後の感想（資料4）では、安全を意識した具体的な工夫・改善策を考えることができた。これらのことから、児童は、安全は与えられるものではなく自ら行動して獲得するものという意識が高まったと考えられる。

資料3 「工夫・改善できること」

ア 実践期間（一週間）	一人平均3.2個（27名で85個）の危険を発見	
イ 条件別の工夫・改善策		
・行動に関する工夫・改善策	63個	「一人で行かない」「暗くなる前に帰る」など
・環境に関する工夫・改善策	22個	「信号機を付ける」「街灯を付ける」など

資料4 「実践後の感想」

○ 安全を意識することに関する記述	12名(44%)
「そんなに危険がひそむところはないと思ったがあった。これからは意識したい」など	
○ 具体的な行動選択に関する記述	6名(22%)
「明るいときだけ通る。夜は行かない」など	
○ 安全を意識することと具体的な行動選択を関連付けて考えた記述	7名(26%)
「気を付けると意外とたくさんあった。これからも気を付けたい。これからは暗い場所や危険な場所には一人で行かないようにしたい」など	
○ その他、無記入	2名(8%)

以上のことから、振り返りの視点に基づいた一週間の実践は、安全の大切さを実感し、習得した知識・技能を日常生活の中で活用しようとする態度の育成に有効だったと考える。

第5学年具体モデル「安全な生活を送ろう～危険がひそむところ～」は、保健学習で習得した「犯罪が起こりやすい条件」を共通の基盤として、保健指導において「条件に目を向けながら考える」思考力・判断力を育成し、それらを日常生活の実践と結び付けられたことから、「危険を回避し、安全に行動できる能力」の育成に有効であったと考える。

2 第6学年『健康的な生活を守る・創るために』

(1) 具体モデルの構想

① 構成要素の設定

ア 学習課題の設定

高学年で目指す子ども像と、保健学習の内容「(3) 病気の予防」と第6学年の健康に関する思考力・判断力を基に、「日常生活における健康の問題を自ら見付け、自分で判断し、処理できる能力」の育成を目指し、「健康な生活を守る・創るために」という学習課題を設定した。

イ 「三つの学習場面」の設定

三つの学習場面として、習得の場面である保健学習の「(3) 病気の予防」と、活用の場面である保健指導「友達からお酒を飲もうと誘われたらどうする?」、振り返りの場面である事後指導を関連付けて単元を構成した。

「習得の場面」では、飲酒の誘惑が身近にあることを意識させ、学習への意欲を高めるために、アルコール飲料の容器と容器の部分写真を提示し、「判断力が鈍る、呼吸や心臓が苦しくなるなどの影響がすぐに現れること」について理解させ、「一度に大量の飲酒」「長い期間の飲酒」「未成年者の飲酒」について考えさせる。

「活用の場面」の導入では、児童に健康的な生活を意識し、健康的な生活を続けることが共通に解決すべき課題であることを共有させるために、日常生活の中に存在する健康的な生活と不健

② 活用の場面

導入では、「不健康な生活からの誘い」の行動を選択する時の気持ちをキャラクターカードを用いて言語化させたところ、資料5のように日常生活の中に「健康的な生活と不健康な生活」が存在していることに気づき、その行動を選択した時の自分の気持ちを考えることができた。

題材の概要を説明し、児童に「攻撃型」では誘う側である友達の気持ち、「受け身型」では、誘われる側であるぼくの気持ちを考えようという視点を示した上で、教師が「攻撃型」と「受け身型」の2パターンをロールプレイングで演じた。児童は、「攻撃型」では、「飲酒の誘いにのらないで断る」という正しい選択をしているのに、「お互いに何となく嫌な気持ち」になってしまうこと、「受け身型」では間違った選択をしてしまっていることに気付いた。その理由を、「友達を攻撃したからイヤな気持ちになった」「友達を納得させていないから嫌な気持ちになった」「飲んでみたいという好奇心に負けてしまった」と予想した。そこで、「誘いを断る」という正しい選択をすることを前提に、「どんなことに気を付けて断れば、嫌な気持ちにならず、正しい選択をすることができるのか」という補助発問をした。その結果、「人間関係」と「好奇心」が断りにくさを生じさせている原因だと解明した。そしてほとんどの児童が「わかりやすく説明をして友人を納得させる」ために、友達との関係を壊さないような表現を取り入れたり、保健学習で習得した「アルコールの人体に及ぼす影響と害など」の知識を活用して、自分の言葉で断り方を表現することができた(資料6)。

そこで、振り返りの視点を「選択した行動とその時の気持ち」とし、不健康な生活からの誘いに対する「断りにくさ」を発見するという事後指導へと児童の意識をつなげた。

以上のことから、習得した共通の知識・技能を基盤として、「友達からお酒を飲もうと誘われたらどうする？」かについて話し合わせ、断る言葉を考えさせたことは、好奇心や人間関係が判断や行動選択を誤らせることに気付いたことから、「自分の生活について要因や規則性、関係を推論しながら考える」思考力・判断力の育成に有効だったと考えられる。

③ 振り返りの場面

振り返りの視点に基づいた実践の結果、一週間で一人平均6.3日間の記録をすることができた。また、これまでの日常生活は、「健康的でなかったこと」「健康を意識していなかったこと」や意識して生活することで気持ち良く過ごせることに気付くことができた(資料7)。

さらに、「これからの生活への決意」の記述内容(資料8)から、振り返りを通して児童は、健康は与えられるものではなく「健康を意識する」「健康的な行動を自ら選択する」ことで獲得するものという意識が高まったと考えられる。

以上のことから、振り返りの視点に基づいた一週間の実践は、健康の大切さを実感し、習得し

資料5 「不健康な生活からの誘い」言語化例

食事	Ken「嫌いだけど、栄養があるから食べよう」
	Aku「嫌いだから、お腹がいっぱいって言おう」
入浴	Ken「汗をかいたから入ろう」「暖まって寝よう」
	Aku「めんどくさいから、入らない・・・」など

資料6 ワークシートの記述

ジュ-ハイはお酒で、アルコールが入って、未成年は法律で飲むことは禁じられてるんだよ。また5年後に飲もうよ、だからいまはがまんしよう。

「お酒は未成年が飲んじゃいけないだよ。飲酒は20才になってからだよ。絶対に飲んじゃダメ。体に良くないえいしょうがでるんだよ。私ももちろん飲まないけど、君も飲んじゃダメだよ。」

資料7 「これまでのわたし・ぼく」の決意

「生活リズムがばらばらで、急げてしまうことがあった。今までは、健康のことをあまり意識していなかったけれど、意識してみと目覚めがよくなり、生活がスムーズになった気がした」など
--

た知識・技能を日常生活の中で活用しようとする態度の育成に有効だったと考える。

資料8 「これからの生活への決意」

- A 健康を意識することに関する記述7人(24%)
「健康を意識して過ごしたら気持ちよかったです、これからも意識していきたい」 など
- B 具体的な行動に関する記述11人(38%)
「早寝早起きをしようと思う。帰ってきてすぐ手洗いうがいをする。嫌いな肉類も頑張るって食べる」 など
- C 健康を意識することと具体的な行動を関連付けて考えた記述11人(38%)
「意識して過ごしたら意外と難しくなかった。毎日バランスよく生活したい」 など

第6学年具体モデル「健康な生活を守る・創る」は、保健学習で習得した「飲酒が身体に及ぼす影響と害」を共通の基盤として、保健指導において「自分の生活について要因や規則性、関係を推論しながら考える」思考力・判断力を育成し、それらを日常生活の実践と結び付けられたことから、「日常生活における健康の問題を自ら見付け、自分で判断し、処理できる能力」の育成に有効であったと考える。

VI 研究のまとめ

1 成果

- 第5学年及び第6学年の具体モデルの授業実践を通して、「保健学習と保健指導を関連付けた習得・活用型授業モデル」は、健康に関する知識・技能を効果的に習得し、それらを活用することを通して、健康を考え実践する力を育成できることが明らかになった。
- 体系化された保健学習と、日常生活での具体的な実践を重視する保健指導を組み合わせることで、発達の段階に即した健康に関する知識・技能を日常生活の実践に結び付けることができた。また、発達の段階にあわせて系統的、計画的な学習活動を繰り返して行える見通しがもてた。

2 課題

- 思考力・判断力を育成する授業モデルを系統的、計画的に繰り返し展開するために、第3学年から第6学年までの具体モデルを完成させる必要がある。
- より効果的な学習活動にするために、具体モデルの実践と評価を蓄積し改善を図る必要がある。
- 具体モデルで培った資質・能力をさらに生かすために、家庭や地域との連携を図る必要がある。

<参考文献>

- ・高橋 浩之 著 『健康教育への招待』 大修館書店(2002)
- ・国立教育政策研究所 [編] 『健康教育への招待』 東洋館出版社(2008)
※「基礎体力の向上をめざす生涯にわたる健康教育の総合的研究」(平成17年度調査実施)
- ・数見 隆生 著 『授業書発想による保健指導の教材づくり』 ぎょうせい(1993)
- ・森 昭三 和唐 正勝 編著 『新版保健の授業づくり入門』 大修館書店(2009)
(担当指導主事 青柳 千春)